

NHK朝ドラ「花子とアン」に寄せて ①

原作「赤毛のアン」を上手にかぶせ

NHKの朝ドラ「花子とアン」が2カ月過ぎたところで、人気だった前作「ごちそうさん」を上回る高視聴率のようです。主人公・村岡花子の生きざまがドラマチックであることに加え、脚本の中でL・M・モンゴメリーの「赤毛のアン」の原作を上手にかぶせていることが一つの要因になっているように私には思えます。

番組の第1回目のナレーションに、まず原作のテーマを表徴した言葉をもってきました。「私がクイーンを出るときには、自分の未来はまっすぐにのびた道のように思えたのよ。いつもさきまで、ずっと見とおせる気がしたの。ところがいま曲がり角にきたのよ。曲がり角をまがったさきになにがあるのかは、わからないの。でも、きっといちばんよいものにちがいないと思うの」（第38章＜最終章＞ 道の曲がり角 村岡花子訳）

順調に見える人生も、途上で何が起こるかわからない。人生の曲がり角で、岐路で思いがけない障害に直面することもある。そのときにアンのようにすべてを前向きにとらえ道を切り開いて欲しい——との著者モンゴメリーが読者に伝えたかったメッセージの要約を紹介したのです。

赤ちゃんをおぶって小学校に行っていたハナが教室で髪の毛をいたずらされからかわれたこと、伯爵令嬢だった蓮子との友情を「腹心の友」と名付けたこと、悪童に嘲したてられて家の屋根の上を歩いて転げ落ちたこと等々、どれもアンが体験してきたことです。原作を読んでいる視聴者には「ああ、あそこの場面を引用しているナ！」とすぐに想像できたことでしょう。

作品が日本で最初に翻訳されたのは、戦後まもなく、山梨県生まれの村岡花子によってでした。戦時中、カナダ人の宣教師からアン の原書を渡された花子は、灯火管制のもと空襲警報が出ると家じゅうの戸を閉め、外に光が漏れないようにした電燈の下で訳し続けた。英語が「敵性語」とされていた状況下、「日本の子どもたちに夢を！」との彼女の何ものにも屈しない勇気が扉を開いたのです。



アンが住んでいたグリーンゲイブルズ

本が出版されたのは、終戦もない昭和27年（1952年）でした。本文の名訳もですが、出色は「赤毛のアン」のタイトルです。もしこれが原作「Anne of Green Gables」の直訳「グリーンゲイブルズのアン」あるいは「緑の切妻屋根のアン」だったら、これほどまでに日本の読者を惹きつけなかったでしょう。彼女は当初「窓辺の少女」「窓に依る少女」「夢見る少女」といろいろ考えたようです。結果的に、当時大学生だった娘の「『赤毛のアン』がピッタリだわ」との強い薦めに従って決まったのだといます。「赤毛」はブロンドにも通じ、黒髪の自分たちとは違う異国の少女へのあこがれの的なものも含まれていたのかもしれませんが。「あかげのあん」との母音の繰り返しも心地よく聞こえます。

私は「赤毛のアン」出版100周年だった2008年、作品の舞台カナダのプリンスエドワード島を訪れました。その前には村岡花子の生地、山梨の文学館で彼女の足跡を紹介する展示会場も訪ねました。そして昨年は思いがけず東京国際フォーラムで行われたミュージカル「赤毛のアン」に出演したのです。

そんな体験をもとに、テレビで展開されていく物語に私の感想や取材をかぶせながらのエッセイをこれから連載していきます。どうぞ楽しみになさってください。